

北口県有地活用検討特別委員会会議録

日時 平成20年1月31日(木) 開会時間 午前10時09分
閉会時間 午前13時06分

場所 第三委員会室

委員出席者 委員 深沢登志夫 土屋 直 臼井 成夫 中村 正則
内田 健 森屋 宏 岡 伸 樋口 雄一
丹澤 和平 土橋 亨

委員欠席者 なし

説明のため出席した者 知事 横内 正明
企画部長 新藤 康二 企画部次長 小川 昭二
企画部次長(情報政策課長事務取扱) 笠井 一
企画課長 古屋 博敏

議題 継続審査案件(北口県有地活用検討の件)

会議の概要 午前10時11分から午前10時16分まで古屋企画課長から資料に基づき説明を受けた後、午前10時16分から午前11時06分まで質疑が行われ(その間、午前10時19分から10時30分まで休憩をはさみ、一旦再開した後、10時36分まで再度休憩をはさみ、知事が出席した)午前11時06分から午後1時03分まで休憩をはさみ、午後1時03分から午後1時06分まで委員会報告書の委員長案について検討、決定した。

主な質疑等

質疑

中村委員長 執行部の説明が終わりました。これより、県の考え方に対する質疑に入ります。

質疑はありませんか。

深沢委員

質疑もないようでありますので。これまで何回か企画部のほうから説明を受けてきたところでありますが、28日には、情報通信業協会から要望があったり、きのうは新聞で、県立図書館とIT企業誘致を核とした高度情報化拠点構想を検討する組織を発足させる方針を固めた旨の報道のあったことなど、局面が大きく変わってきているかなという感じを持つのは、私だけではないと思います。

そしてまた、今、新県立図書館整備検討委員会から、このような最終報告もあり、また、知事も検討する段階に来ているという現状を考えたときに、そのことと、企画部の段階ではもう答弁に限界があるんじゃないかと思えます。これまでの企画部の説明は、皆さん方おおむね了承しているように思われますので、また、この特別委員会が報告をするに当たっても、局面が変化しているということ、今まさに私が申し上げているようなことの中で、この

際、知事に出席していただき、説明を求めたいと思いますが、いかがでしょうか。お諮りください。

中村委員長

ただいま、深沢委員から知事の出席を求める動議がありました。動議の取り計らいにつきましては、協議を要しますので、暫時休憩をしたいと思います。ここで休憩します。

(休憩)

中村委員長

休憩前に引き続き、会議を開きます。
休憩前に出されました、知事の出席を求める動議を議題といたします。委員会への出席説明の要求は、委員会条例第18条の規定に基づき、委員会が決定し、行うこととされています。
お諮りいたします。委員会への知事の出席を求めることについて、ご異議はありませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

中村委員長

ご異議なしと認めます。よって、本委員会に、知事の出席を求めることといたします。
暫時休憩します。

(休憩)

中村委員長

会議を開きます。
それでは、北口県有地の活用策について、知事の説明を求めます。

横内知事

去る1月24日、新県立図書館整備検討委員会から、新県立図書館の建設場所は、人や情報の交流しやすい北口県有地が適当であると報告を受けました。

したがって、私といたしましては、この報告を尊重し、新県立図書館は北口県有地に設置する方向で検討したいと考えております。

この場合、北口県有地は約9,000平方メートルという広い土地でございまして、新県立図書館を設置したとしても、なお面積的に余裕があると見られます。この場所は本県の一等地であり、県民の共有財産として、極力有効に活用することが適当であると考えますので、私としては、この北口県有地に、図書館と連携させながら、高度情報化のための拠点施設を整備し、図書館も含めた全体を高度情報エリアとしてはどうかと考えております。

この情報拠点施設には、近年急成長しております情報通信産業を受け入れ、本県における情報産業の発展、ひいては本県活性化の起爆剤的な役割を担うことを期待したいと思っております。

これとあわせまして、情報拠点施設には、県民や県外から本県を訪れる人々がさまざまな情報を入手したり、交流したりするための諸機能も含めることとしたいと考えております。

なお、新図書館は、県が事業主体として建設をいたしますが、情報拠点施設につきましては、県財政の非常に厳しい折でありますので、民間活力を活用してはどうかと考えております。

今後、検討組織を設け、図書館と連携した情報拠点施設のあり方や事業スキームなどについて検討し、明年度のなるべく早い時期に全体構想を県議会及び県民の皆様にお示しし、ご意見を承りたいと考えております。

以上でございます。

中村委員長

ありがとうございました。知事の説明が終わりました。質疑はありませんか。

岡委員

北口について、知事さんが一生懸命努力されて、それなりの結果が出はじめているところで、そのようなことに対しましては、私としては、甲府選出の議員という立場もございまして敬意を表したいと思っているところであります。

今まで、知事選の中の公約からするならば、あれっ、というふうに感じるところもあるわけですが、私は前向きにとらえていきたいと考えています。

図書館の問題も一つありますけれども、北川県有地の活用ということでもありますので、IT企業との関係。知事さんが昨年5月に情報政策アドバイザー会議を立ち上げました。そのメンバーはどういう形で検討されたのか、また、あわせて、そのメンバーが、委員とオブザーバーの2つに分けられている。なぜ、そのように分けなければならなかったのかということでもあります。ほとんど全員の方が会議に出席されているようでもありますので、なぜそのような形に分けられたのか、その点を。

横内知事

情報政策アドバイザー会議の委員についての御質問であります。

委員長は甕(もたい)さんという、旧郵政省で通信部長をお務めになった、通信技術行政における我が国の最高レベルにある方で、現在もそういう立場で御活躍になられている方でございます。そういう分野の皆さんからは、その人柄とか能力等について高く評価されている方でもあります。同時に、長野県の御出身ではありますが、山梨大学工学部の御出身でありまして、かねてより、中央コリドー通信実験というプロジェクトがございましたが、その中心的なメンバーでございまして、本県の情報化の促進について大変御心配をいただき、御理解をいただいている方でもありますので、委員として、また委員長として適当な方と判断してお願いしたわけでもあります。

その他の委員につきましても、それぞれ、そういった情報通信分野で専門的な知見を有する方をお願いしたところであります。

日本銀行国際局長、元甲府支店長であります。出沢(いでさわ)さん、それから、当時はNTTドコモの代表取締役副社長の石川さん、山梨県の御出身の方であります。現在は、株式会社協和エクシオの代表取締役副社長をしておられます。それから、山梨大学大学院の教授で情報工学が御専門の新藤さん、日本電気株式会社の執行役員専務であります広崎さん。いずれも情報関係で専門的な知見を持たれ、その分野では高く評価されている方々であります。

なお、オブザーバーについてでありますけれども、これにはあまり深い意味があるわけではございませんが、総務省総務審議官の鈴木さんにも出ていただいて御意見を承りました。鈴木さんは、まさに情報政策の現在の中心的な役割を果たしている方でもありますけれども、しかし現職の公務員というお立場でありますので、委員として参加するということには支障があるということでありまして、オブザーバーということで出席していただいて、適宜御意見を承るという形にしたものであります。また、中央コリドー高速通信実験プロジェクト推進協議会事務局長の北村さん。この方も、この中央コリドー高速通信実験プロジェクトについて長く努力されてきた方でもあります。山梨大学研究支援・社会連携部長の田中さん。あるいは株式会社デジタルアライアンス、これは本県の情報ハイウェイを管理している会社でありますけれど

も、代表取締役社長の鈴木さん。この方々は、総務省の鈴木さんは現職の公務員というお立場である、それ以外の方々は事務方的な方でありますので、委員というよりはオブザーバーの方がよからうということで、そういう整理をしたということでございます。

岡委員

詳細にわたって御説明をいただきましてありがとうございました。

問題は、実は、今日したかったのは、5月に立ち上げて11月に報告を受けている。その間に、会社と若干なりとも接触を持っていたと。これは部長の御説明ですが、8月頃からすでに関係していたと。そういう話を受けたとき、私は、報告がないにもかかわらず、どうしてその時点からセッティングを持ったのか、それについて、非常に不審を感じたんですね。その辺の経過について若干お聞きしておきたい。実は、それを部長に聞いたんだけど、わからないということでしたので、知事さんの方から御説明いただきたいと思えます。

横内知事

情報通信産業は、産業の中でも非常に成長性の高い産業であり、かつ最先端の分野として、日々、非常に大きく変動し、変化している分野であります。したがって、私は、本県の場合は東京にも近いし、そういうものを、大いに、活性化のために、本県のおいても振興したいと考え、また、最近では、東京における情報通信産業が発展していく中で、バックアップ施設だとか、バックオフィスのようなものだとか、あるいはコールセンター的なものが地方に分散していく、という動きが非常に顕著に表れてきております。例えばソフトバンクなどという会社は、岐阜県の飛騨の山の中に膨大なバックアップセンターをつくるというようなことがありました。そういう中で、情報通信産業を本県に誘致して、本県の活性化を図りたいという思いが強くなりまして、そんな意味で、やはり、これは、産業界がどう考えているかを我々としては知らなければならぬということもありますし、また、非常に最先端の分野ですから、情報政策アドバイザー会議の議論を適切なものにするためにも、そういった産業界の意見もよくよく把握した方がよいということで、私自身も含めて、いろいろな、そういう情報通信の関係者に御意見を聞いたということがあります。ただ、それが、何か特別な意図を持っているとかというようなことは全くないわけでありまして、情報通信業界の最近の動き、それから地方分散というような可能性みたいなことについて、また、本県での情報通信産業の可能性というようなことについて、いろいろな意見を収集したということでございます。

岡委員

あまり細かいところまで、というのは、ちょっと引っかかりがあるとは思いますが、何社かにあつたのではなく、1社だけにあつたというような話の仕方であつたと、私は理解していたので、その辺についてちょっと感じたということ。

時間も忙しいような感じもいたしますので、多く申し上げることもなにかと思っております。そこで、最後に一点だけ。9,000平方メートルの中に図書館一つではもったいないというような言い方だつたと思うわけでありまして、図書館は大体どのくらいの面積でつくろうとお考えなのでしょう。

横内知事

この前、整備検討委員会から報告書をいただいて、機能だとか、入れるべきものの内容とか、そういうものについては、かなり詳細に報告を賜りました。県としては、これを踏まえて整備計画をつくっていきたいと思っております。そういう中で、具体的に、例えば書架の部分はどのくらいだとか、そう

ということも計算したり、つめていかなければならないと思っていますけれども。だいたい、延べ床で1万平方メートル前後というようなところか、という感じをもっていますけれども。なお詳細につめていく中で、整備計画というものを策定いたしますので、その中で明らかにさせていただきたい、御意見を承りたいと思っています。

岡委員

ありがとうございました。

いずれにいたしましても、一定の面積が出てこない、どのくらい余るのか、余るのかという点で変ですけども、基本的には北口へ図書館という考え方で、それに付随する形でIT企業というようなことだと感じていますので。今、話をうかがいまして、延べ床面積で1万平方メートルということですから、何階建てかという部分について出てくると思うわけですね。

そのこととあわせて、今までの経過の中で、こちらへ来る関係の、北口を中心としたメディアの関係者から、500ないし1,000名くらい入れるホールを1つつくってもらいたいというお話が、今まで、検討委員会の中で聞かれてきたわけでありまして。これらについての考え方を最後にお聞きして終わります。

横内知事

1万平方メートル前後と申し上げました。これは、もちろん、共有部分、エレベーターの部分とかなんとかありますから、1万平方メートルぴたりということではなくて、これは、もう少し詳細に積算した上で御説明させていただかなくてはならないわけですが。いずれにいたしましても、それが2万、3万になるということはない。1万平方メートル前後ということで御理解いただきたいと思います。

それから、ホールにつきましては、会議室的なものは必要だと思っていますけれども、500人収容とか、そういう大きなものは必要ないのではないかと。今の県立図書館にも200人収容の会議室があります。だからといって、この200人の会議室をつくるということまで申し上げているわけではありません。そのことも含めてこれからの検討であります。500人というようなものは必要ありませんけれども、会議室的なものは必要ではないかと思っています。

岡委員

了解いたしました。

丹澤委員

前回、北口県有地活用策検討の方向というペーパーを出していただきました。知事さんは、前議会のときから、北口は高度情報エリアにしていきたい、その核となるのは、県立図書館と高度情報化拠点施設だという思いを述べられてきたわけでありまして。

今、壊滅的な北海道の経済の状況ですらも、今一番、かろうじて元気なのは情報関連サービス産業だと言われております。

知事さんは、先ほど、今、ここで、アドバイザー会議の中で、IT関連がどういう状況で進んでいるのか、そういうことを知りたかったと。その中で、北口を情報エリアとして、そして片方を高度情報化拠点施設に整備するというようなお考えをまとめられたわけでありましてけれども、知事さんはこのアドバイザー会議の中で心証を得て、山梨県にITを持ってくれば必ず経済が好調になる。そして、昨日もここにいる皆さんと一緒に東京エレクトロンへ行ったんですけども、若者は、東京エレクトロンで働いて下さいと云っても、仕事は確かに魅力があるけれども山梨まで行ってやるのはいやだと言っ

そういうふうな中で、この知事さんの思いを、IT企業をここに集積したらそういう若者が引くこともなく、山梨に、積極的に、人材として来ていただけたという感じを持たれたと思うんですけれども、そういう、知事さんの持たれた思いをここでお聞かせ願いたいと思います。

横内知事

情報産業が非常に成長し、特に、若い頭脳労働者の就業場所として雇用の創出が非常に大きい状況にあるということは、委員のご指摘のとおりであります。なんととっても本県は東京に非常に近いわけでありまして、北口の場合には、駅のすぐ近くで何かあったときは東京にすぐに飛んでいける。特に情報産業というのは、極めて先端的な、コンピュータを使った産業でありますけれども、それであるがゆえに、最後のところは、ぎりぎりのところはフェイス・トゥー・フェイスの人間関係というのがどうしても必要になる産業でありますから、北口のあの辺というのは、そういう情報通信産業の場所として東京あたりから移転してくる場所として適当ではないかという思いを強く持っています。そういうことになれば、移転してくれば、当然、いわゆるソフトウェアの開発部隊みたいなものには若い人たちが多いわけですから、若い人たちが山梨に移ってくるということになりまして、かなり、若い人たちが山梨に入ってくるということになります。また、山梨大学その他、大学も近くにありますが、そういう人たちの就職の場にもなると思っています。

そういうことで、情報拠点施設というものをつくって、そこに先端的な情報産業が立地することによって、甲府駅周辺の地域が、情報通信産業が集積していく地域になる呼び水というか起爆剤になれば、私としては非常に、必ずそうなるということまでは保証できないわけではありますが、そうなる可能性があるのではないか、その可能性をぜひ追求してみたいと思っています。

丹澤委員

全国的にも、なかなか企業誘致も難しい状況の中で、山梨県は東京に近い。昨日、「八王子には大学がいっぱいある。あの八王子の大学と連携すれば1時間だと。この地の利を生かすべきだ」といった人がいましたけれども、ぜひ、知事さんもその思いを込めて、この北口を拠点に、山梨県をITの集積場所にするという思いでありますので、ぜひ、その夢を現実のものとして実現していただけるように、私たちも知事の思いが実現できるように支援して参りたいと思っています。

森屋委員

今日はありがとうございました。まさに今、丹澤委員がおっしゃったように、昨日、東京エレクトロンに行って大変大きなショックを受けてまいりました。それは、従来持っていた東京エレクトロンATがどこかへ移転してしまう、県外へ出ていってしまうということではなくて、深沢会長が段取りをさせていただいた中、まさに、東京エレクトロンの皆さん方がおっしゃったことで一番印象深かったことは、山梨県のトータルイメージが悪すぎる、というようなお話をいただいたことです。これは、私なんかも東京に自民党の会議で行きますと、茨城、栃木の方々が私に対して、「森屋さん、今日は時間がかかって遠いところから申し訳ありません。」なんてことを言われてしまうんです。私は、家から自民党本部まで行くのに車で行けば1時間15分かからなくて行くんです。よっぽど、茨城、栃木の人たちよりも早く東京に着けるんです。しかしながらそう言われてしまう。それは、今までの山梨県のトータルイメージが、そういうふうに見られてしまっていると思います。ですから、そんな意味で、これからこういう時代ですから、ぜひ、政治家としての知事の言葉としてどんだんいろいろなことを発信していただく。今

までのような、行政の皆さん方の限界というのがこういう時代には感じるんです。ですから、今回のこの北口の開発問題につきましても、ぜひこれからも知事の積極的な発言、今日、こうやって委員会に出てきていただいたことは、大変大きな、山梨県の行政の転換だと本当に肌で感じます。ですから、これからおそらくいろいろな計画を出されていく場面というのがあると思います。従来のような行政手法ではなくて、やはり、ところどころで時間をおいて、知事の生の声で、こういう、議会の皆さん方と議論していくような場面を今後もつくっていただきたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

横内知事

委員の御指摘のように、議会に御説明するという事は県民の皆さんに御説明することでありますので、議会から求められれば、どういう場にも出席して私の思いをお伝えしたいと思います。

森屋委員

かつて、7年ほど前に、ここにいる内田議長とドイツのフライブルクというところに行ったことがあります。そのときに、私たちはそういう予想もしていませんでしたけれども、向こうの、フライブルクの市役所の皆さん方から、「よくぞドイツへお越し下さいました。山梨県はアジアの中で最も環境政策に優れた街ですね。」と言われました。それは、あの当時、天野知事が、イクレイ（ICLEI）という、世界でもトップレベルの環境団体の、たしかアジアの理事を務めていらっしゃったんですね。そういう意味で、トップの方の姿勢というのは、これからは世界に響くということですから、ぜひ、そういうことを知事に御期待申し上げて、私の発言といたします。

樋口委員

ありがとうございました。知事の意気込みは、質問に答える形、冒頭の報告の中でよくわかりました。

建設する北口のある甲府市との連携。今までもされてきたと思いますが、あるいは、前県政の中では新しい学習拠点という形の中で進めてきた。そして選挙でそれがなくなり、白紙にして、また北口ということですから、甲府市も、あるいは周辺の住民も、とまどったり、その検討の結果を非常に注視している。あるいは甲府に関わらず県民が想像している。一定の決意と抱負が、多くの時間と労力をかけて整ったわけでありますから、ぜひ甲府市との連携をしっかりと強化してほしい。なぜこんなことを申し上げるかというと、昨年、宝石専門学校が紅梅町に新しくできるビルに入ることが決定しました。ちょっと寝耳に水といいますか、市の行政が驚いたということも聞いたりしておりましたし、これから大きな事業としてやっていくわけでありますから、ぜひ、甲府市との連携を重ねてお願い申し上げます。

深沢委員

この特別委員会では、当初は、知事の出席まで求めなくてもいいだろうというようなことに決まったことも事実であるわけであります。

先ほど、知事の出席を求める発言を、私が申しましたが、局面が非常に変わってきております。知事の燃える思いも聴取しています。議会と執行部・知事は、車の両輪であります。そうした考えの中で、今までは、知事さんを出しても困る、ガードするのが執行部。よくガードするのが偉い職員だという時代があったわけでありますが、横内知事は開かれた県政でいくんだということですので。自らがトップセールス、トップランナーだと。今日も静岡へ行くようだったんですけども、特別委員会のために時間を割こうというようなことでありまして、もうそろそろ出かけなければならないんだろうと思いますけれども。

特別委員会もそれなりに議会の立場で議論してきました。真剣に取り組ん

できたことも事実であります。知事も、この北口の問題については、機をみて敏でなければならぬ。というのは、IT産業というのは乗り遅れたらどうしようもない。そういう時代の流れの中で、意欲的に取り組んでおられます。我々も、一応、特別委員会に知事に出てもらったことで、一つの結論は引き出したのではないかなという感じもいたすわけでありませう。

報告書のまとめをする中で、委員会は閉じて、あと、適宜、議会との連携を絶やすことなく、適切に時の動きを議会に報告していただき、我々も、いいものは是であり、これはまずいというものは非でありますよ、ということも議会の立場できちんと言って、県民の信頼に応えていきたいという思いであります。

一応、知事に出てもらったということで、この委員会も大きな意義があったと思います。先ほども発言がありましたが、やはり県政史上に残る今日であろうと思います。こんな1ページを記したというお互いの気持ちを大切にしながら、今後とも県政進展のためにお互いに努力していく、そんな思いでまとめるといふことで、皆さん方のご同意をお願いしたい。

知事さん、お忙しいところ、ありがとうございました。

中村委員長

以上で、質疑を終了いたします。

それでは、意見をおおむねいただいたようですので、委員会報告の方法について協議したいと思っております。ここで一時休憩とし、再開後、委員会報告書の委員長案を示したいと思っております。ご了承願います。

委員長案をまとめますので、再開はおおむね午後1時ということにしたいと思っております。

なお、執行部への質疑、質問はすべて終了しておりますので、再開後は、説明員には必要に応じて出席を求めるといたしたいと思っております。ご了承願います。執行部の皆さんには、必要に応じて出席を求めますので、再開後は自室にて待機をお願いいたします。

どうも、ありがとうございました。

その他

- ・ 委員会報告書の整理及び委員長報告については、委員長に一任し、閉会した。

以上

北口県有地活用検討特別委員長 中村 正則